長岡京市文化財調査報告書

第 69 冊

2016

長岡京市教育委員会

編集 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
長岡京市文化財調査報告書

第69冊

2016

長岡京市教育委員会

編集 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
序 文

私たちの長岡京市は、豊かな水と緑に恵まれた良好な環境と大都市を結ぶ交通の利便性により発展してきました。

古くは旧石器時代から人々が生活を営んだことがわかっており、特に784年に「長岡京」という当時のわが国の首都が置かれた地として、全国的に知られています。また、市内には史跡恵解山古墳をはじめとする長築塚や、勝龍寺城などの城館跡、乙訓寺・長岡天満宮といった神社仏閣など、数多くの文化遺産が点在し、現代に至るまで豊かな歴史と文化を守り育んできました。

しかし、こうした遺跡は、まちの発展の一方でかつての姿が失われつつあります。本市では、これらの遺跡の調査・保護に力を入れるとともに普及・啓発に努め、地域全体で風土や文化遺産を守るまちづくりを進めています。特に今年度は、広域的な史跡指定を目指してきた「乙訓古墳群」が、古墳時代を通して首長墓の系譜を突き、当時の政治状況を知ることができる極めて重要な古墳群として指定されました。これにより、本市では、すでに国の史跡である恵解山古墳に加え、井ノ内車塚古墳・井ノ内稲荷塚古墳・今里大塚古墳が新たに国の史跡となりました。

さて、本報告書は、平成27年度に長岡京市教育委員会が実施した井ノ内地区における発掘調査の成果をまとめたものです。調査は長岡京の全容解明を目的として実施し、井ノ内地区では、乙訓地域の首長墓群を考えて重要で重要な井ノ内車塚古墳の後円部西側に取り付き、遺物の状況を詳しく調査し、全体像を把握しました。

最後になりましたが、発掘調査にあたり数々のご助力をいただきました土地所有者や地元協力者の方々、ご指導・ご助言をいただいた諸先方が私を名を連れていただいた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。本书が文化財保護の普及・啓発の一助となり、また地域学習の資料として広く活用いただければ幸いです。

平成28年3月

長岡京市教育委員会

教育長 山本 本和 紀
凡例

1. 本書は、長岡市教育委員会が平成27年度に国庫補助事業として公益財団法人長岡市埋蔵文化財センターに事業を委託して実施した発掘調査に関する概要報告である。

2. 調査対象地は、第1図および付表-1に表示した。

3. 長岡京跡の調査は、右京域と左京域に分けて通算したものです。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の調査分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1977年)収録の旧大学小学名による地区帰りと同地区内における調査回数を示す。

4. 長岡京跡の条坊名称は、山中章『古代条坊制論』『考古学研究』第38巻第4号(1992年)の領域案に従った。

5. 本書で使用する地域区分は、特に断らない限り『長岡市域地形分類図』『長岡市史』資料編一(1991年)によった。

6. 本文の(注)に示した長岡京に関係する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡市埋蔵文化財発掘調査資料選』(五)(2015年)に従って略記した。

7. 本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査番号＋番号であるが、発掘面図を伴うため調査番号を省略する場合がある。「SD01」の場合、調査番号を冠した「SD000001」が正式な番号である。

8. 本書で使用している方位と国土座標値は、旧座標系の第VI系によっている。

9. 本書の塗図の土塀名で〈〉を付けて表示した記号は、『新版標準土地のJIS 表記法による地名である。

10. 本书の執筆及び編集は、公益財団法人長岡市埋蔵文化財センターの中島が行った。

付表-1 本書報告調査地一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>調査番号</th>
<th>地区名</th>
<th>所在地</th>
<th>現地調査期間</th>
<th>調査面積</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>井ノ内車塚古墳第8次</td>
<td>7ANGK−9</td>
<td>長岡市井ノ内向井芝4</td>
<td>2015年8月20日～2015年11月25日</td>
<td>148㎡</td>
<td>井ノ内車塚古墳</td>
</tr>
</tbody>
</table>
第1図 長岡京と調査地の位置（1/40000）
本文目次

井ノ内車塚古墳第8次調査概要
——長岡京跡白川第1119次（7ANGKT—9地区）——

1 はじめに .......................................................................................................................... 1
2 調査経過 .......................................................................................................................... 2
3 檢出遺構 .......................................................................................................................... 6
4 まとめ .............................................................................................................................. 18
図版目次

図版1 調査地全景（北西から）
図版2 （1）1トレセン 全景（南東から） （2）1トレセン 全景（西から）
図版3 （1）1トレセン 前方部廃棄の遺物出土状況（東から） （2）1トレセン 周溝の堆積状況（南西から）
（3）1トレセン 土塚墓（南から）
図版4 （1）2トレセン 全景（南東から） （2）2トレセン 全景（北から）
（3）3トレセン 全景（南東から）
図版5 （1）3トレセン 須恵器出土状況（南東から） （2）3トレセン 赤色顔料出土状況（北西から）
（3）3トレセン 確集中央（南東から） （4）4トレセン 全景（南西から）
図版6 （1）5トレセン 全景（南西から） （2）5トレセン 全景（東から）
図版7 （1）5トレセン 造り出し上面の状況（北西から） （2）5トレセン 造り出し北側の小穴（東から）
（3）5トレセン 造り出しと北壁の土層堆積状況（南から）
図版8 （1）5トレセン 塩輸出土状況・上面（西から） （2）5トレセン 塩輸出土状況・上面（東から）
（3）5トレセン 塩輸出土状況・下面（西から） （4）5トレセン 塩輸出土状況・下面（北東から）

付表目次

付表-1 本書報告調査地一覧表 .................................................. ii
付表-2 井ノ内車塚古墳調査履歴一覧表 ..................................... 2
付表-3 報告書抄録 ............................................................... 18
挿 図 目 次

第 1 図 長岡京と調査地の位置（1/40000） ................................. iii
第 2 図 発掘調査地位置図（1/5000） ........................................ 1
第 3 図 井ノ内車塚古墳調査区配置図（1/500） .............................. 2
第 4 図 井ノ内車塚古墳墳丘測量図（1/200） .............................. 3
第 5 図 現地説明会風景（南から） ......................................... 4
第 6 図 5トレンチ 埋め戻し風景（北西から） ................................. 4
第 7 図 墳丘と調査区全体図（1/200） .................................... 5
第 8 図 1トレンチ 前方部の周溝（北西から） ............................... 6
第 9 図 1トレンチ 検出遺構図・土層図（1/50） ............................ 7
第 10 図 2トレンチ 検出遺構図・土層図（1/50） .......................... 8
第 11 図 3トレンチ 検出遺構図・土層図（1/50） .......................... 9
第 12 図 3トレンチ 北西側溝溝等出土状況実測図（1/10） .......... 10
第 13 図 4トレンチ 検出遺構図・土層図（1/50） .......................... 10
第 14 図 5トレンチ 土層図（1/50） .................................... 12
第 15 図 第6次調査2トレンチ・第7次調査中央トレンチ・本調査5トレンチ 13・14
検出遺構図（1/50）
第 16 図 5トレンチ 小穴実測図（1/40） .................................. 15
第 17 図 5トレンチ 造り出し北辺回転出土状況実測図（1/30） .......... 17
井ノ内車塚古墳第8次調査概要
―長岡京跡石宮第1119次（7ANGKT-9地区）調査―

1 はじめに

1 本報告は、平成27（2015）年8月20日から11月25日まで、長岡京市井ノ内向井芝4において実施した、井ノ内車塚古墳第8次調査（長岡京跡石宮第1119次調査）に関するものである。

2 調査は、乙調査群の史跡指定に向けて、井ノ内車塚古墳の墳形や規模などを確認する目的で実施したもので、調査面積は148㎡を測る。

3 調査地は、長岡京跡の石宮二条四坊十五町にもあたるため、長岡京に関わる遺構、遺物の確認も合わせて行った。

4 発掘調査は、平成27年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、現地調査は中島啓夫が担当した。

5 発掘調査にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺地権者の方々や関係機関に種々のご理解とご協力を賜った。

6 調査においては、東出比呂志氏（埋蔵文化財センター専門委員）を始め、専門の諸先生方からご指導を賜った。

7 本報告の編集と執筆は中島が行った。

第2図 発掘調査地位置図（1/5000）
2 調査経過

井ノ内車塚古墳の概要

井ノ内車塚古墳では、2回の測量調査と5回の発掘調査が実施されていた（第3・7図、付表2）。平成26年度に実施した第7次調査までの成果から、これまでに確認されている井ノ内車塚古墳の概要を以下に列記する。

・後円部
  • 長さ 39 m、後円部の直径約 24 m、前方部長約 17 m、前方部幅約 26 m
  • くびれ部幅約 17 m、後円部高約 3 m、前方部高約 2.5 m（高さは現地表から）

・主体部 未確認

・土取設施 未確認、葺石なし、埴輪（埴輪列未確認）、後円部南西側に造り出し、周溝

・埴輪 宮殿焼成、普通円筒埴輪（3条突帯4段）、朝顔形円筒埴輪

・土器 土師器、須恵器（MT15～TK10型式）、韓式系土器

調査の目的

本調査は第7次調査までの成果を踏まえ、以下の3点を主要な調査目的として実施した。

・後円部南西側造り出しの全容解明と、東側における造り出しの有無

・前方部前面で確認されていた溝の追求と範囲確認

・主体部に関わる情報の収集

付表2 井ノ内車塚古墳調査経歴一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>調査年度</th>
<th>後円部</th>
<th>くびれ部</th>
<th>前円部</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 1967年</td>
<td>测量調査</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2 1977年</td>
<td>测量調査</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3 1999年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4 2011年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5 2012年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6 2013年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7 2014年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8 2015年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

第3図 井ノ内車塚古墳調査区配置図（1/500）
第4図 井ノ内塚古墳塚丘測量図（1/200）
調査経過
今年度の調査では、9月3日から8日まで対象地域全域における竹や樹木の伐採処分を実施した。その後、培土などの再測量作業（第4図）とトレングル設定作業を9月10日に行い、10月5日から本格的な掘削作業に着手した。期間中は好天に恵まれ順調に調査作業が進捗した。11月7日には、現地説明会を京都市芝古田と同日に開催し、約240名の参加者を得ることができた（第5図）。また、現地説明会後には諸先生方が来訪され、現地指導及び重要な教示を数多く頂いた。現地説明会後、部分的な掘削作業や確認掘削作業を行い、記録作業がほぼ終了した11月16日から埋め戻しに着手した（第6図）。そして、道具撤去などを全ての調査作業が終了したのは11月25日であった。

調査区の設定（第3・7図、付表-2）
1トレングル 第3次調査で測定されていた前方部前面を入る溝を追求するために、前方部前面の東方に設定した。第3次調査前トレングル・第4次調査1トレングルと重複しており、トレングルの規模は東西約9m、南北約4m、面積30.1m²を測る。なお、調査期間の終盤に、周辺の幅を確認するためトレングルの中央部を再測定した。
2トレングル 後方の南東側において造り出した構築物の有無を確認するために、西側造り出し南辺の対象位置に設定した。トレングルの規模は東西約2m、南北約4mで、4.7m²を測る。
3トレングル 主体部に関する情報を得るために、後方部から南東方向に延びる掘削坑のほぼ中央に設定した。トレングルの規模は幅約1m、北西から南東の長さ約10mで、約6.4m²を測る。
4トレングル 3トレングルと同様に主体部に関連する情報を得るために、後方部の掘削坑に設定した。第7次調査前トレングルと重複しており、トレングルの規模は東西約4m、南北約2mで、約4.6m²を測る。
5トレングル 西側造り出しの一部を解明するため、後方部西側から西側と北側にかけて、第6次調査前トレングル・第7次調査中央トレングルと重複して設定した。トレングルの規模は東西約8m、南北約12mで、面積は約81.2m²を測る。
第7図 塗丘と調査区全体図 (1/200)

※第3次調査（3-北・南）は等高線が25cm間隔であるため、3南トレーンと関連する4-1、8-1トレーンも同様とした。他のトレーンの等高線は10cm間隔。
3 検出遺構

1トレンチ

前方部の墳丘斜面（第9図） 1トレンチの北辺では、表土・蔵土の下で前方部前面の墳丘斜面を検出した。墳丘は後述の周溝によって周囲と画されるが、前方部前面は樹木の根株などによって乱されており、トレンチ中央部から東側がやや塩丘側へ湾曲していた。墳丘斜面の基部は黄褐色粘質土、茶黄色砂疊土の山が割り出されており、その上に黒褐色の盛土が認められる。墳丘斜面はトレンチ西端で高さ0.15m程度を測るが、遺存状態は東側ほど良く、第4次調査1トレンチとの重複範囲では斜面がほぼ失われていた。墳丘盛土はトレンチの中央部分を中心に認められ、地山との境界は標高約47.3mを測る。また、前方部機部は標高47.2m前後を測る。

墳丘斜面の東側では地山面において不整形な土壌を確認した。土壌の理土は墳丘盛土に似た黒褐色粘質土であるが、遺物も出土しておらず古墳との関連は判然としない。

前方部南側の周溝（第8・9図） 前方部の前面を画する周溝は第3次調査南トレンチで確認されていたもので、本調査では重複部分を含め東西約7.5mを確認した。また、周溝が前方部南部端まで掘削されておらず、その約3m前後で途切れることも併せて確認している。第3次調査では周溝の上面幅が約1.7mと報告されている。トレンチのほぼ中央部を拡張して溝幅の確認を試みたが、拡張部分では南側が後世の地山地によって失われていた。確認できた周溝の規模は、上面の幅2.4m以上、底部の幅約2m、深さ0.4m前後を測る。周溝底の高さは、標高46.8m前後で、第7次調査で検出した前方部西側の周溝底部高に比べ約0.3m高い。周溝内には茶灰色系の理土（第9図第12・13層）が堆積していたが、造り出し周辺のような複雑な堆積状況ではない。周溝からは硬質化して2箱の願輪片が出土しており、それらは底面からやや浮いた位置に比較的まとまっていった。また、周溝理土の中位では長岡開期の遺物が数点出土している。

その他の遺構

土壌層（第9図） 1トレンチの西端、墳丘斜面で土壌層1基を検出した。土壌層と判断したのは埋土に銅釘数点と刀子1点が含まれていたためであるが、棺身の痕跡は確認できなかった。土壌層の主軸は墳丘主軸と異なりほぼ南北方向で、幅1.6m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。土壌層からは鉄製品の他、土師器・願輪片が出土しており、土師器の特徴から長岡開期前後のものと考えられる。

地溝層（第9図） 周溝南側と重複して茶褐色土・茶褐色土などを埋土（第5〜9層）とする溝を検出した。現在の地溝および操縦があり全容を確認できないが、幅3m以上、深さ0.4m以上を測る。埋土からは瓦器・願輪片などが出土している。
第9図 1トレンチ 検出断面図・土層図（1/50）
2.トレンチ

土層の堆積状況と出土遺物（第10図）2トレンチでは、上から表土、栽培土、茶灰～茶褐色土の順に地山へ至る。茶灰～茶褐色土（第3～5層）は0.4m程度の厚さで堆積し、少量ながら土器・瓦器・鉄器片が含まれていた。また、頚城盛土と考えられる黒褐色土や黒褐色土の混じりが認められることから、この堆積は後円部南東側の横浜坑洞側によるものと考えられる。なお、地山の出雲状況などから、後円部東側に造出していくなどの構築物は存在しないことが分かった。

墳丘外の平坦面と南東側への斜面（第10図）2トレンチは推定される後円部の南東側にあたり、検出した地山面は墳丘外側の基盤となる地形と考えられる。基盤地形はトレンチの北西側が最も高く、中央部に向かって緩やかに傾斜する。高さは標高46.6 ～ 46.8mであり、第4次調査でトレンチをせき場付近における墳丘外の平坦地形とはほぼ同じ値であった。南東側はトレンチ外へ続く斜面であり、トレンチ南東側の最深部は標高約46.2mを測る。

3.トレンチ

土層の堆積状況と発掘集団（第11図）3トレンチの北西側では表土、栽培土を除去した段階で土が集中する状況を確認した。発掘は不敷充など意図的な配置が見えず、また、発掘中の灰褐色土も稀に白い土であることから、構築物ではなく探査など二次的な移動によるものと考えられる。井戸内壁をも含めた過去にこのような発掘が確認されている。厚さは4.5mに近い、一般的な家室壁壁や裏込め石として相応しいものではないが、検出位置や深さなど内室式石室との関連が非常に注目される。このため、調査では発掘の除去を土層観察で必要となる範囲に制限した。

発掘集団を含む堆積層（第4～7・11～18・21層）は厚さ0.2～1mで、北西側を中心に認められる。発掘集団より南東側では堆積層の下部に墳丘盛土と考えられる黒茶褐色土（第19層）
第11図 3レンチ 堆出遺構図・土層図 (1/50)
を、後円部中心に近い北西側では須恵器を含む黄灰色土（第8層）と赤色顔料（第9層）を確認している。

須恵器と赤色顔料（第11・12図） 3トレンチ北西側では、第8層から須恵器片が比較的まとまった状態で出土した。杯蓋2個体以上・蓋付壷1個体・器台1個体以上・壷1個体があり、杯蓋は陶色釉TK10型式の特徴を備えている。須恵器が出土した高さは47.7 m前後に、現地下約1.9 mにあたる。また、厚さ約0.15 mの第8層を部分的に除去した範囲で赤色顔料と考えられる土を確認した。須恵器と赤色顔料は横穴式石室の葬儀器に伴う可能性を強く示唆している。このため調査では須恵器の取り上げに留め、第8層、赤色顔料とも検出状況のまま埋め戻しを行った。

4トレンチ（第13図）

4トレンチでは、表土、濃茶灰色土の下で、黄白色ないし茶灰色粘質土（第4層）の埴塚盛土を確認した。トレンチ南東部では、第7次調査北トレンチから続く埋葬坑を検出している。この埋葬坑は前述した3トレンチの埋葬坑と一連のものと考えられる。埋葬坑が推定される後円部の中心付近から掘削されたことを想定させる。埴塚盛土とした面は標高約48.6 mであり、3トレンチにおける須恵器等の出土高に比べて約0.9 m高い位置であった。埴塚盛土とした土については、石室の有無と関連するため、今後の調査結果を持って再検討を行う必要がある。なお、4トレンチでは表土、埋葬坑埋土から少量の埴輪片が出土している。
5トレンチ

土層の堆積状況（第14図） 後円部西側、造り出し北辺の土層堆積状況は、第7次調査中央トレンチで得られた知見とほぼ共通するものであった。以下、堆積の状況をより上位のままりである1層から述べるが、文中の（）内にはまとまりに含まれる個別土層番号を示した。

表土の下には1層とした填坑盛土が混じる堆層がある（第3～9層）。この層は数の開掘など填坑区画の頂平に伴うものであり、埋設ではあるが近代陶磁器片を含んでいた。

II層は灰色土を主体とする弱粘質土と砂疎土（第12・13層）で、II層上層（第12層）を完全に除去した段階で造り出し上部の輪郭が姿を現す。

III層は混じりの少ない茶灰色ないし黄灰色粘質土（第14～16層）で、ほとんど遺物が含まれていなかった。他の堆積層と異なる状況であるため、層の鈍きを埋めるために他所からもたらされたものとも考えられる。

IV層は比較的明るい茶黄色土（第17～19層）を主体とする。第7次調査の造り出し西側ではその範囲が満状を呈しており、本調査でも満状の範囲がさらに南北へ続くことを確認している。これまでIV層は周溝の窪みに堆積したものと評価していたが、北壁土壁観察により下層の遺物出土状況から、造り出し下半が埋没した段階で掘削された層とも考えられる。IV層には填輪片とともに、少量ながら平安時代～中世の土器、須恵器、瓦器片が含まれていた。

V層は赤みの強い茶灰色粘質土（第20～25層）で、最大0.5mの厚さまで堆積していた。造り出し西側では填輪片が多く含まれており、造り出しの北部においても（第20層中段、第22層）から大量出土している。V層の堆積によって造り出しはほぼ埋没しており、後円部を含む周部の外観が大きく変化したとも考えられる。

VI層は暗い茶灰色を呈しており、地山の砂疎や造り出し盛土の粘土が混じる堆積層である（第26～33層）。特に、造り出し由来の粘土は砕石を施さない填坑の崩落過程を示すものであるが、填輪片以外の遺物がほとんど含まれていなかったため、VI層がどの程度の期間を経て堆積したのかは判然としない。

最下層のVII層（第34層）は茶灰色系の粘質土を主体とするが、その性質からは周溝内の恒常的な滞水は認められない。この層は造り出し西側の溝状を呈する窪みに堆積しており、後円部西側にあたるトレンチ北壁では認められなかった。また、その堆積状況からは、この層が主に周溝西側の急峻な地山斜面からもたらされたことが分かる。

後円部の西側斜面（第7・15・16図） 完成した後円部西側斜面はすべて地山を削り出して形成されている。後円部西側の斜面部は標高46.1mを頂点、第7次調査北トレンチの推定船部高より0.7m低い位置にあるが、この高低差は古墳西側の周溝造り出し周辺を中心に深く掘削されたため生じたものと考えられる。掘削部から0.5mの高さまでが傾斜角度約25°の斜面で、その上には造り出しの北側接続部分で収束する幅0.5～1.8mの不明瞭な平坦面が認められる。この平坦面上では地山から掘削された小穴3基が残されていた。いずれも長さ0.3m前後の不整形であり、深さは0.1～0.25mを測る。小穴は古墳との関連が非常に注目されるが、埋戻には遺物
結水域内山古墳第8次調査 15

第16図 5トレンチ 小穴実探区 (1/4)

が全く含まれておらず、柱痕跡も検出されていない。また、小穴の間隔も不均一であったため、埴輪や木製樹物の掘り付け坑が判断できなかった。

後円部西側は、前述した平坦面から高さ0.3mで約35°の斜面を経て、造り出し上面と同じ高さとなる。この部分には造り出し後続部から続く幅1m前後の平坦面が認められる。この平坦面においても地山から掘削された小穴が3基検出された。南北の形態は下段の小穴に近いが、他の1基は長軸0.6mの長楕円形であり、埋土も新らしいの悪い東粘質土であった。この平坦面の東側に0.15m前後の段差があり、墳丘側では地山まで達する掘削坑が数カ所認められる。

後円部の盛土（第7・14・15図）後円部の基部は地山を削り出して形成されているが、トレントン東壁では部分的に墳丘盛土と考えられる黒茶褐色粘質土（第14図第36層）を確認した。第36層を墳丘盛土とした場合、地山との境界は標高47.5m前後であり、第7次調査1トレンチの後円部北西斜面における地山標高（47.3m）、第8次調査北トレンチの後円部北斜面（47.5m）、第5次調査1トレンチの後円部北東斜面（47.3m）に近い値であることが分かる。

前方部の地山標高は、前方部前面の第3次調査南トレンチ、第4次調査1トレンチ、本調査1トレンチが後円部に近い標高47.3mであるのに対し、くびれ部付近の第5次調査2トレンチ（46.9m）、第6次調査2トレンチ（46.8m）、前方部東側の第7次調査南トレンチ（46.6m）では0.5m程度低い値が得られている。井ノ内山古墳の基盤である地山のあり方については、周辺地形を含めた検討が必要だろう。

造り出し（第15図）井ノ内山古墳の造り出しは、後円部南西側から西くびれ部の間に接続しており、本調査では造り出し北辺の状況を明らかにできた。造り出しの規模は、上部の南北幅が約5mと推定され、南西側への突出が2.5mを測る。また、造り出しの底部における規模は、南北の幅8.3m、南西側への突出が4.5mを測る。西側の周溝底から検出した造り出し上面まで
の高さは1.2mであった。なお、造り出し上面では原位置を留めた埴輪や埴輪解体部が造り出されておらず、また、造り出し周辺から大量の埴輪片が出土していることから、古墳築造当時の造り出し上面は失われているものと考えられる。

造り出しの盛土（第14・15図）造り出しはすべて盛土によって構築されており、第15図には盛土の平面的な範囲を示した。盛土には山地及びの黄色土を主体とする層、黒褐色の層が重複し、これらが交互に積み重ねられていた。また、造り出し下部では、前面を土手状に厚く施した後、その内側を充填する状況が認められた。さらに、造り出し上面では、盛土充填時の単位と考えられる層厚0.5m前後の椙円形ブロックを確認している。

造り出し接続部と平坦面（第7・15図）後円部と造り出しの接続部は、地山と盛土の境界線として確認でき、後円部と同様な円弧を描く。前述したように接続部の構造は後円部で確認された平坦面と同じ高さで、また、2段築築成の隆丘平坦面に造り出し接続するように見える。しかし、平坦面から隆丘斜面への立ち上がりにあたる低い斜面は、後の削平によって生じたもので、造り出しおよび平坦面の上面と同様に古墳築造時の姿を残すものではない。

これまで井ノ内車塚古墳では外表施設として段築が確認されていない。しかし、これは隆丘斜面に築造が施されておらず、さらに植林などで乱されていること、埴輪片や埴輪解体部坑など平坦面の存在を示す成果が得られていないためである。

井ノ内車塚古墳では埴輪片が造り出し周辺から大量に出土する。しかし、造り出し以外の範囲、例えば前方部東側の第5次調査2トレンチでは埴輪外の平坦地形上での埴輪片が、また、後円部西側や前方部西側、そして前方部前面でも一定量が出土している。一方、調査において椙出された築築成した隆丘等高線からは、後円部造り出し周辺の平坦面以外に後円部北西側と南東側の隆丘約47.5m付近で斜面が急やかになる範囲が認められる。また、前方部東側および西側の隆丘約47.5～47.7mでは、前方部の開きに沿う平坦面を読み取ることができる。こうした平坦面は後世の削平によるものであるが、古墳築造時代の隆丘平坦面の位置に影響を受け、削平や竹掛の関係で行われた可能性も考慮する必要がある。

造り出し周辺の地山（第7・15図）後円部南西側に接続する造り出しは、その前面が底層底に沿って外部から切り離されていた。第7次調査中央トレンチではトレンチ南西側を拡張し、古墳周側より西側の地山面を明らかにしている。西側の地山面は標高46.8mで確認されており、造り出し周辺では深さ約1m以上の開削が行われたことがわかる。

造り出し周辺の周囲は四角形に建ており、その底部は標高45.7～46.0mを測る。これに対し、造り出し周辺以外の隆丘幅率高は標高46.5～47.4m（主軸上の後円部延長47.4m、後円部北東側46.9m、東側すべり部46.5m前後、前方部南東側47m前後、主軸上の前方部延長47.2m）と0.8m以上高い位置にあり、第6次調査2トレンチでは造り出し台周辺から前方部に向かって周囲が緩やかに立ち上がりの状況が明らかにされており、造り出し周辺の地山がより深く掘削されたために高低差が生じたものと推測できる。このような造作は、造り出しの高さを強調するとともに、古墳築造に際する努力を図るために行われたと考えられる。
造り出し周辺の埴輪出土状況（第14・17図） 造り出し周辺の周溝内からは大量の埴輪片が出土しているが、本調査の出土遺物は本格的な洗浄作業に着手していないため詳細を明らかにできない。埴輪を中心とした遺物の出土量を概算で示せば、造り出し周辺の第6次調査2トレンチで整理箱にして約20箱、西辺の第7次調査中央トレンチが16箱、北辺にあたる本調査5トレンチでは21箱で、造り出し周辺の周溝からはこれまでに計60箱近く遺物が出土している。出土遺物の大部分は普通円筒埴輪であり、須恵器の硬質な焼き上がりのものが目立つ。形状埴輪は橙色を呈する軟質のものが多い。形状埴輪の器種には家、蓋、巫女、馬、犬、石見釜などが確認されており、造り出しに多彩な埴輪群が配されていたことが分かる。

造り出し北辺では、後円部西側と造り出し北辺に挟まれた谷敷部で埴輪片が集中する状況を確認した。埴輪はV層（第14図第20・22層）の下層に多く含まれる。特に大きな破片として家形埴輪の寄せ埴部片があり、堅魚木も数点確認している。家形埴輪片は稲の一部がほぼ水平状態で出土しており、内部の接続突起から母屋の位置が推定できる。また、第17図には図示していないが、この範囲からは鶴形埴輪の燧・輪丸部片が1点づつ出土している。埴輪密集範囲に含まれる破片は大半が10cmまでであり、造り出しにおける埴輪祭祀の後に破壊され、周溝へ投棄されたものとも考えられる。なお、第7次調査と同様に1m方眼の区画を設定し遺物の取り上げを行っており、今後の整理作業で埴輪の面的な選多、形状埴輪の分布などを検討する予定である。
4 まとめ

井ノ内車塚古墳はこれまでの調査で、地型や規模、盛土の状況、そして、多彩な埋葬 Swarm を捉えることが明らかとなっている。本調査では、以下のような成果を新たに収めることができた。

① 第3次調査で検出された溝が前方部前面を画することを再確認した。
② 後円部南東側には造り出しなどの施設が存在しないことを明らかにした。
③ 後円部南東側開乱坑内で横穴式石室の存在を示唆する須恵器、赤色顔料などを確認し、初めて主体部に関する情報を見つけることができた。
④ 後円部南西側面の状況と、南西側に接続する造り出しの全容を明らかにした。
⑤ 新たに大量の埋葬資料が得られ、形状石棺では石棺形の石棺の存在を初めて確認した。

特に、横穴式石室の確認に迫る資料が得られたことは、本調査で最も重要な成果といえる。横穴式石室の存在を確認しその内容を解明することは、乙訓古墳群における井ノ内車塚古墳の位置付けだけでなく、他地域との比較において、乙訓古墳群や古墳時代後期の乙訓地域を評価するため欠くことのできない非常に重要な事項である。今後、詳細な調査の実施が待たれる。

注1） 小家 章「井ノ内車塚古墳第3次調査概要」「長岡京市報告書」第41冊 2000年
2） 山本健雄「井ノ内車塚古墳第4次調査概要」「長岡京市報告書」第61冊 2012年
3） 山本健雄「井ノ内車塚古墳第5次調査概要」「長岡京市報告書」第64冊 2013年
4） 山本健雄「井ノ内車塚古墳第6次調査概要」「長岡京市報告書」第66冊 2014年
5） 中島健夫「井ノ内車塚古墳第7次調査概要」「長岡京市報告書」第68冊 2015年

付表-3 報告書抄録

| 所在地 | 長岡京市久保田寺東条10番3号の1 |
| 市町村 | 長岡京市 |
| コード | 26209 |
| 北緯 | 34°56′28″ |
| 東経 | 135°41′10″ |
| 調査期間 | 2015年8月20日～2015年11月25日 |
| 調査面積 | 148m² |
| 調査方法 | 観察確認調査 |

<table>
<thead>
<tr>
<th>遺跡名</th>
<th>遺物名</th>
<th>遺物種</th>
<th>主な時代</th>
<th>主な遺構</th>
<th>主な遺物</th>
<th>特記事項</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>井ノ内車塚古墳</td>
<td>古墳</td>
<td>古墳時代</td>
<td>後円部、南側開乱坑内</td>
<td>両端器、須恵器、突縁器、薄銅鏡</td>
<td>鍵穴式石室を示唆する須恵器などを確認。</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>長岡京跡 (石棺第11号)</td>
<td>石棺</td>
<td>平安時代</td>
<td>鎮金具</td>
<td>石棺形柄瓶、須恵器、突縁器、瓦器、陶器</td>
<td>鍵穴式石室を示唆する須恵器などを確認。</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

※御度、経度の測定は調査区の中心で、国土座標の直角座標系を使用している。
井内車塚古墳第8次（長岡京跡右京第1119次）調査

（1）1トレッチ 前方部周溝の遺物出土状況（東から）

（2）1トレッチ 周溝の堆積状況（南西から）（3）1トレッチ 土塚墓（南から）
井ノ内車塚古墳第8次（長岡京跡右京第1119次）調査

(1) 2トレンチ 全景（南東から）

(2) 2トレンチ 全景（北から）

(3) 3トレンチ 全景（南東から）
井ノ内車塚古墳第8次（長岡京跡貯京第1119次）調査

(1) 3トレンチ 須恵器出土状況（南東から）
(2) 3トレンチ 赤色顔料出土状況（北西から）

(3) 3トレンチ 碳集中部（南東から）
(4) 4トレンチ 全景（南西から）
図版六

（1）5トレンチ 全景（南西から）

（2）5トレンチ 全景（東から）
(1) 5トレコ 造り出し上面の状況（北西から）
(2) 5トレコ 造り出し北側の小穴（南から）
(3) 5トレコ 造り出しと北壁の土層堆積状況（南から）
(1) 5トレンチ 塚輪出土状況-上面（西から） (2) 5トレンチ 墳輪出土状況-上面（東から）
(3) 5トレンチ 墳輪出土状況-下面（西から） (4) 5トレンチ 墳輪出土状況-下面（北東から）
長岡京市文化財調査報告書 第69冊

平成28（2016）年2月22日 発行

編集 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒617-0853 京都府長岡京市奥山寺東条10番地1
電話 075-955-3022 FAX 075-951-0427

発行 長岡京市教育委員会
〒617-0851 京都府長岡京市陸田一丁目1-1
電話 075-951-2121（代）

印刷 山代印刷株式会社
〒602-0062 京都府京都市上京区寺之内町通小川西入
堂院前町588番地
電話 075-441-8177 FAX 075-441-8179